

段丘の風景～河岸段丘に暮らす

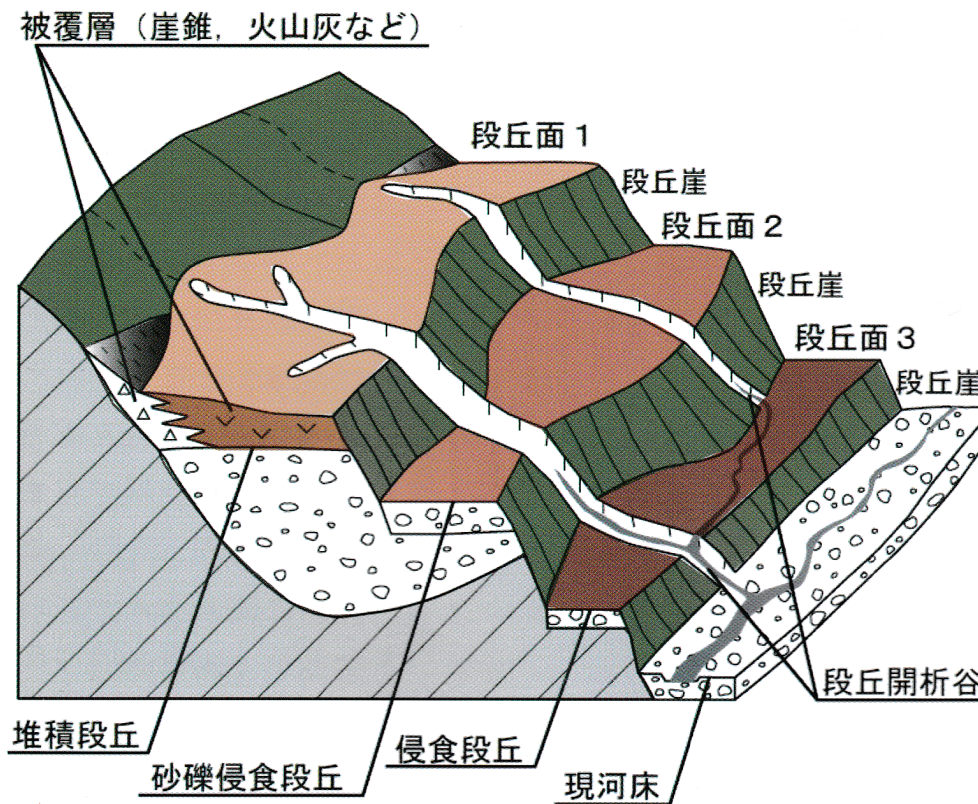
【寄藤 昂】

構成

1. 河岸段丘とは
 - 1.1 形成の過程と土地条件
 - 1.2 河岸段丘の "名所"
2. 上野原の河岸段丘
 - 2.1 地形の概要
 - 2.2 段丘の詳細
3. 河岸段丘に暮らす
 - 3.1 土地利用の変遷
 - 3.2 人口動態
 - 3.3 上野原の将来

1. 河岸段丘とは

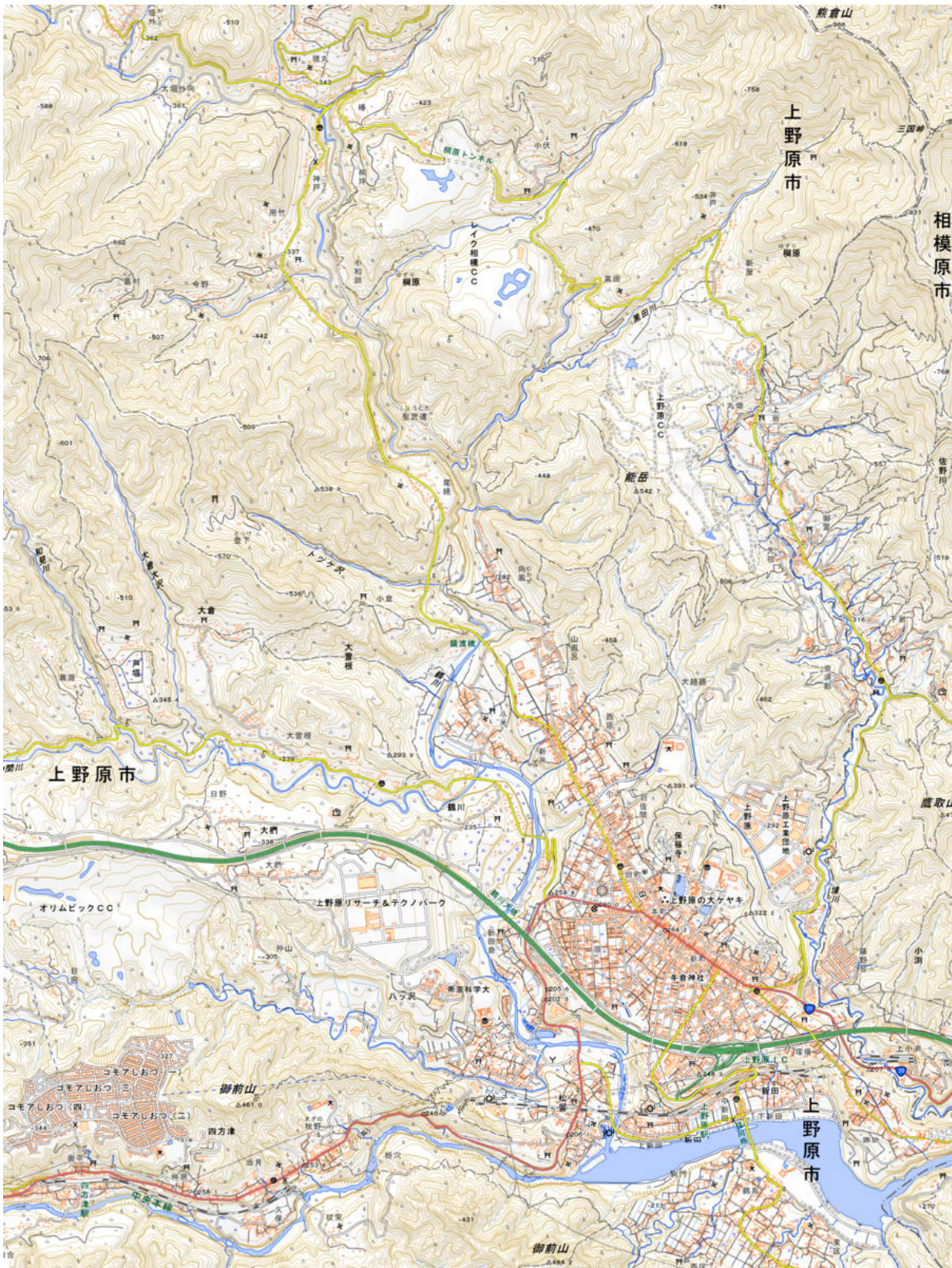
河岸段丘とは河川沿いに発達する階段状地形で、平坦な段丘面と急斜面の段丘崖という地形要素で構成されている(図)。堆積段丘は堆積作用で谷を埋めて段丘面ができ、侵食段丘では側刻(横方向への侵食)で河原が広がって段丘面ができる。段丘面は過去の河原を含む氾濫原であり、それを河川が掘りこみ、段丘崖(長く連なるものは崖線)をつくって、洪水時にも冠水しなくなる事を段丘化と言う。(柳田、2024)



河岸段丘の概念図 (柳田原図)

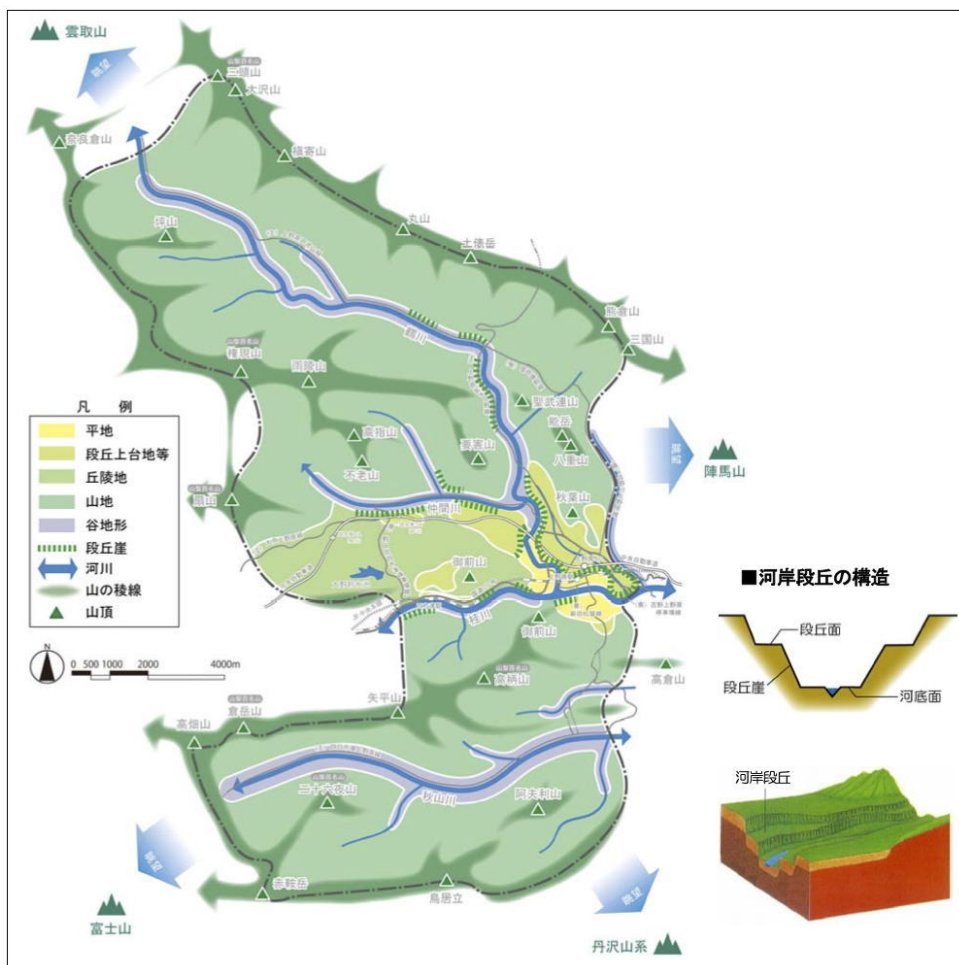
段丘面 1 は堆積段丘、段丘面 2 は砂礫侵食段丘、段丘面 3 は侵食段丘。

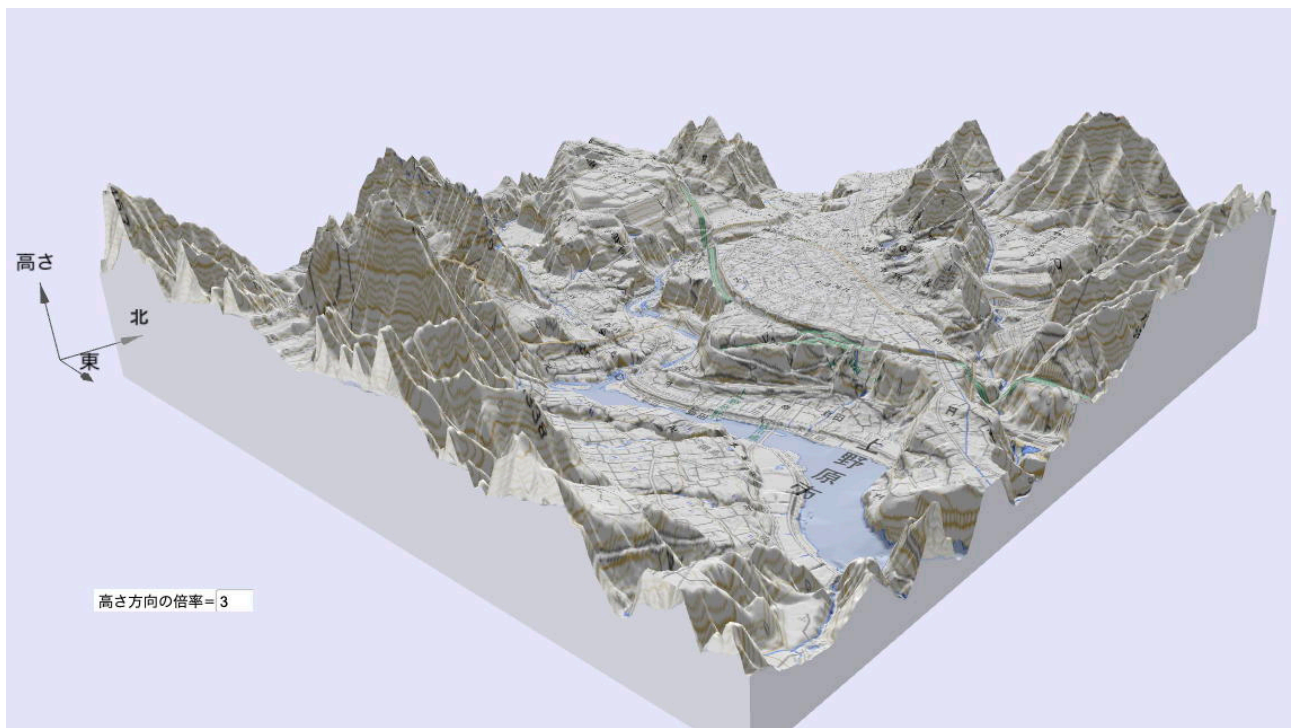
2. 上野原の河岸段丘



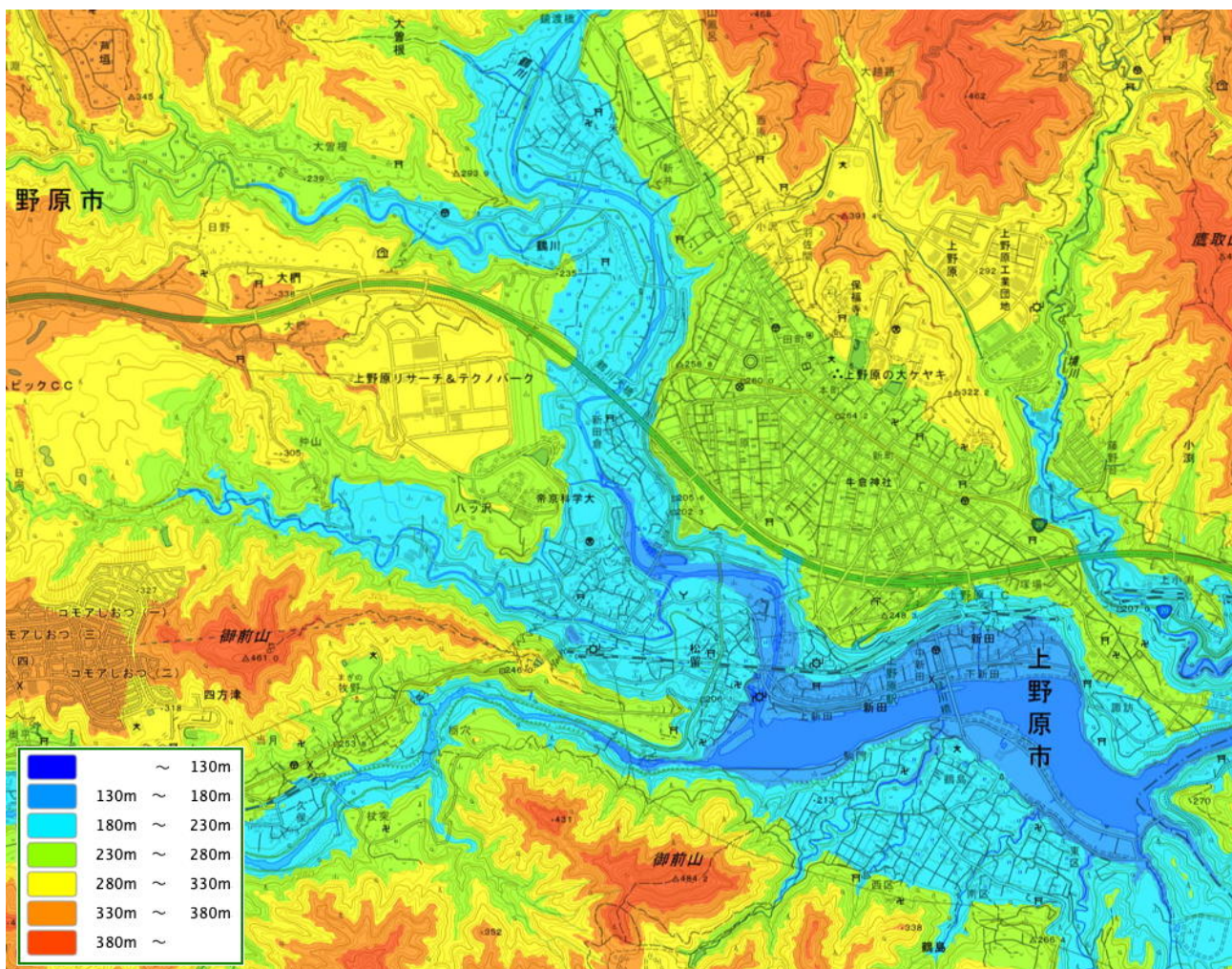


上「上野原市景観計画」 p.10 下「同」 p.34

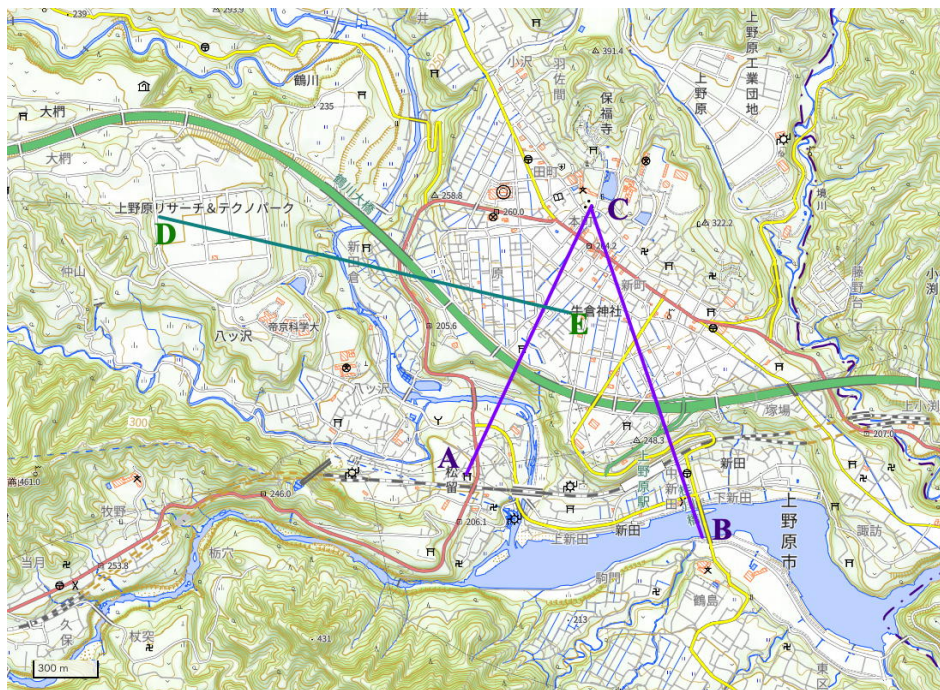




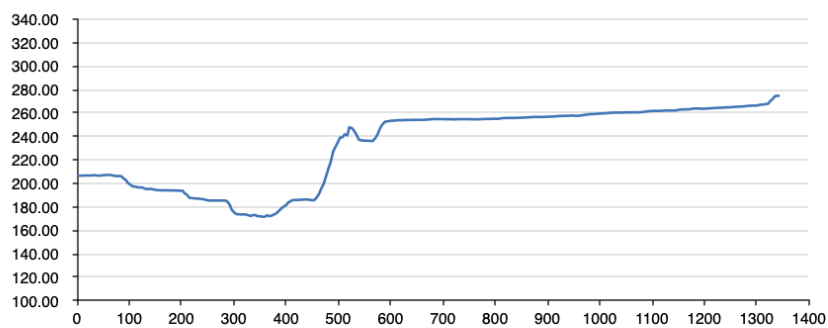
地理院地図3Dによる



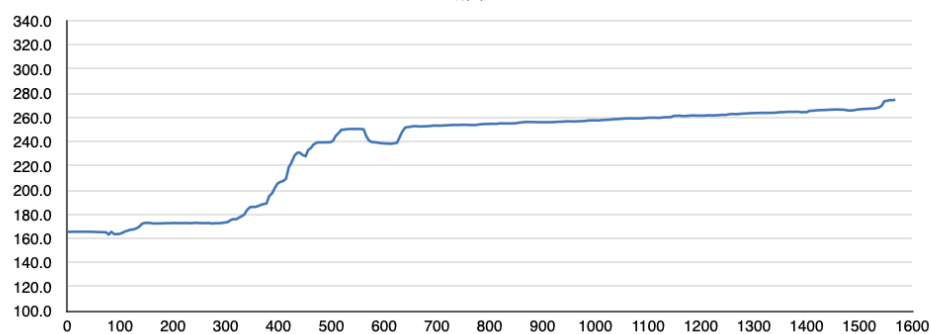
地理院地図による（次ページも）



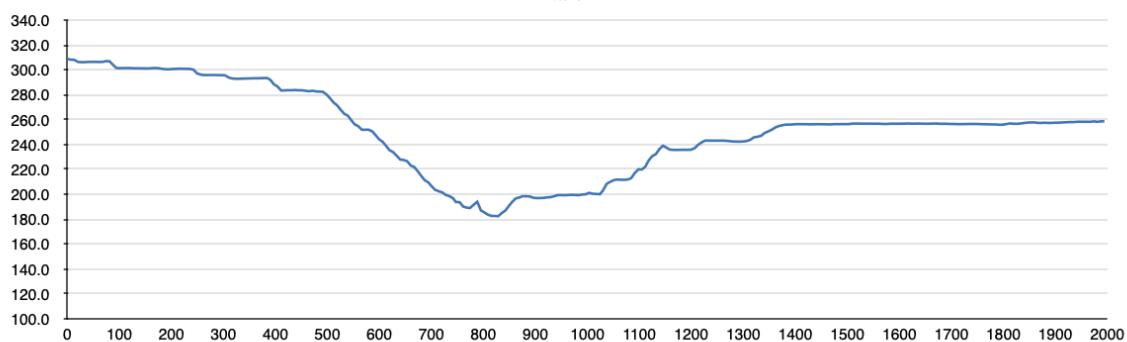
断面 A—C



断面 B—C



断面 D—E



3. 河岸段丘に暮らす

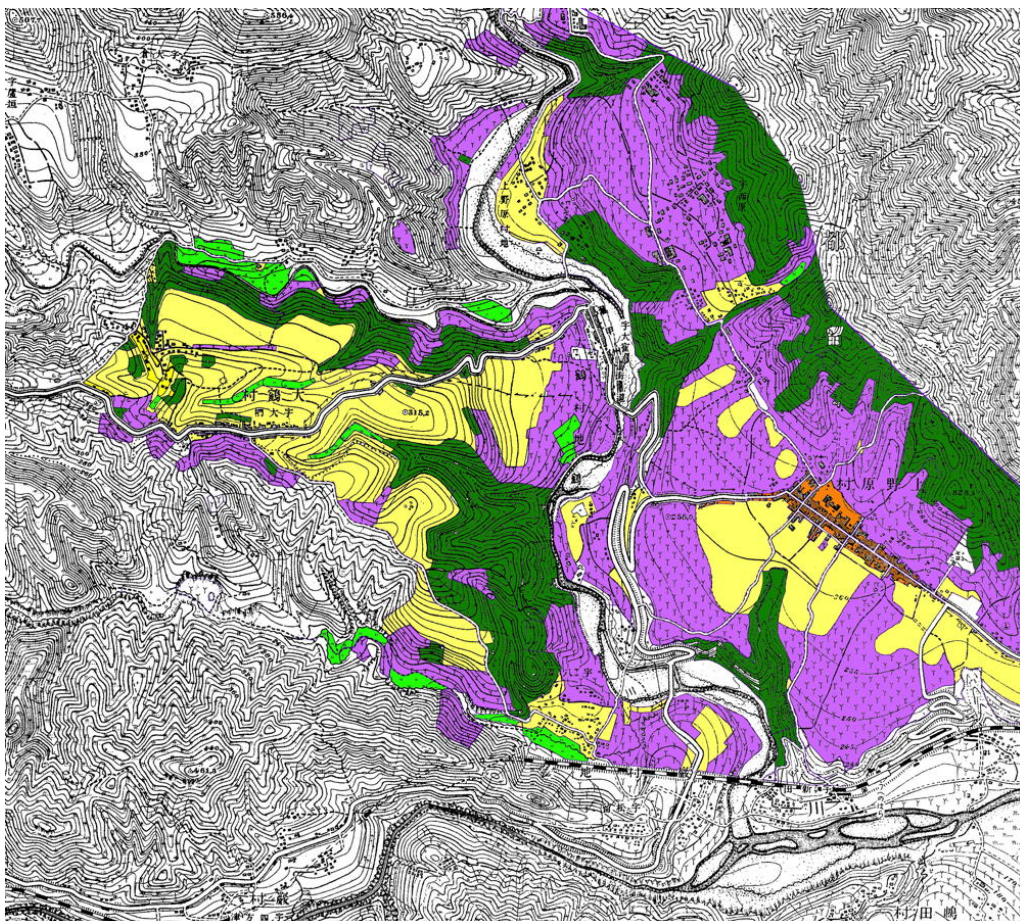
上野原市は、昔から水が少ない地域でした。当時は米を作れず、病気が流行り、大火事の発生などで人々は生活に苦しんでいました。

「米作りがしたい・・・水が欲しい・・・」という住民の願いから、上野原用水の歴史が始まります。水源を桐原三二山の鶴川に決め、大正5年に着工し、トンネルや水管橋を造る大規模な工事になりましたが、3年後の大正8（1919）年に延長約9kmの幹線水路が完成しました。念願の通水の日を迎えると、人々の歓声で溢れ、用水が流れる流域は、水田地帯に生まれ変わりました。（「月見里農業紀行 上野原用水」 p.6）

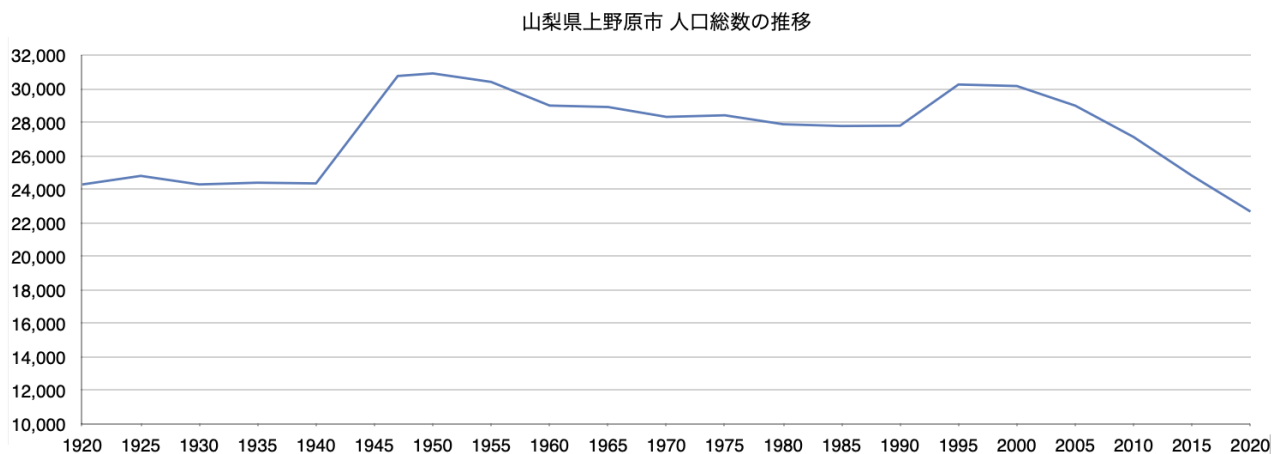
1909年、1965年、2009年発行の国土地理院地形図から簡易な土地利用図を作成した。以下に凡例と各図を示すが、中心部（段丘では中野面）は桑畑－水田－市街地・住宅地へと変遷している。

土地利用の凡例

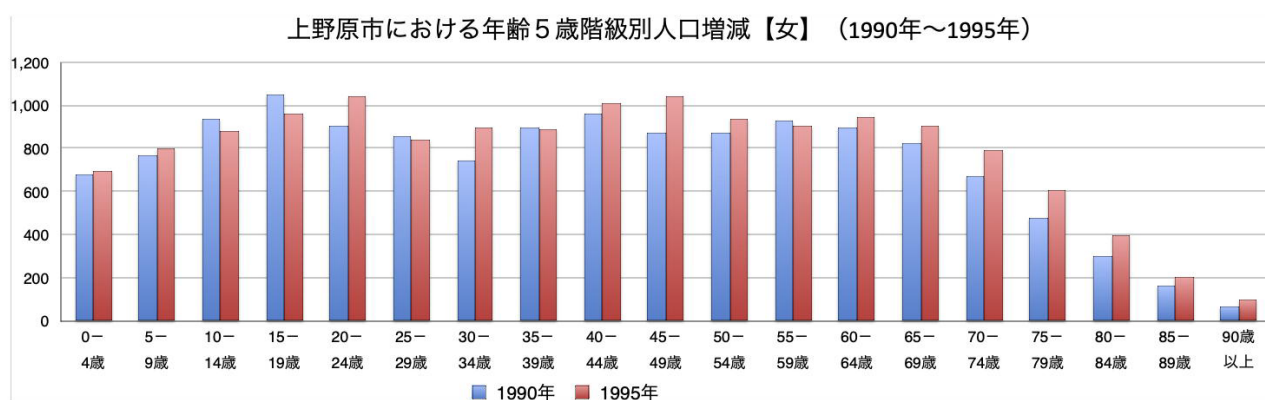
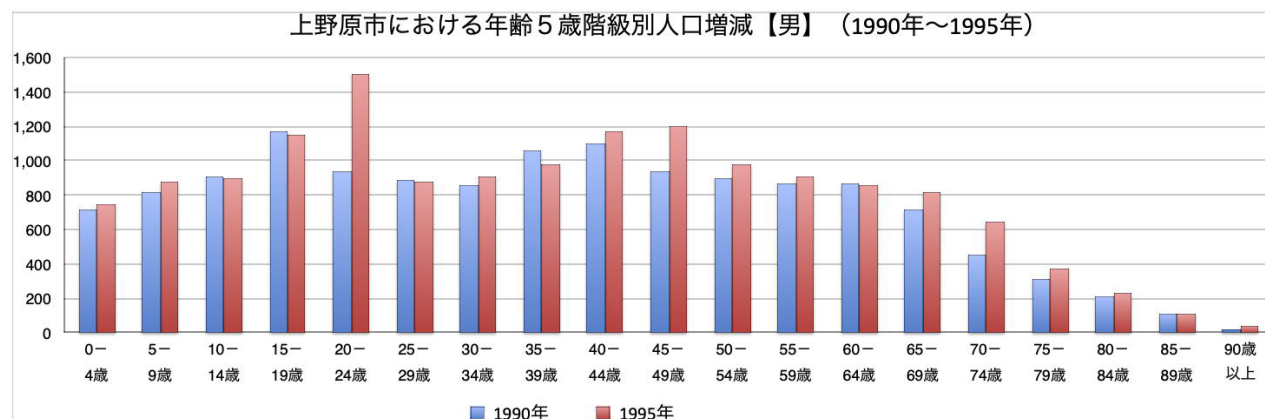
	水田
	畑
	桑畑
	森林等
	集落・都市施設



上野原市の人口推移（現在の市域に組み替えて合算）を示す。



1990年～95年に人口が急増している。その内訳を見ると・・・

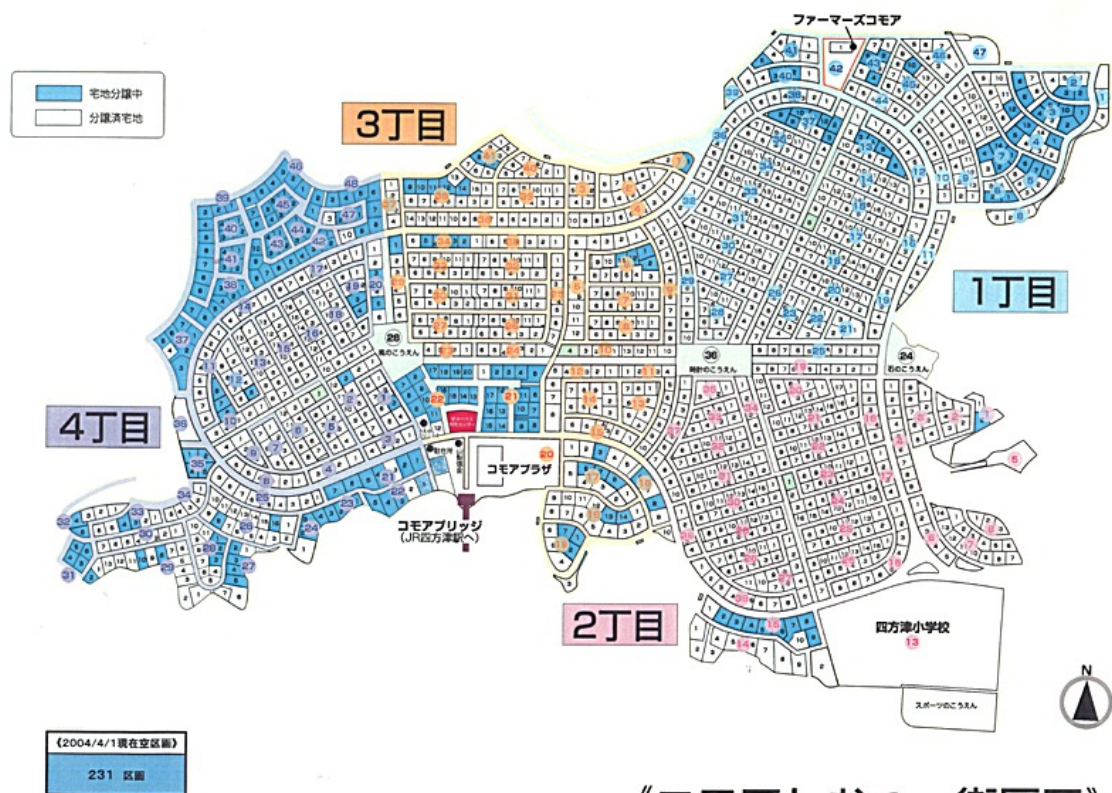


1990年に「西東京科学大学（現帝京科学大学）」が開校、さらに1991年に民間開発による大規模ニュータウン「コモアしおつ」が分譲開始したことによる。

人口増減の20歳～24歳の急増は前者の、40歳～54歳の増加は後者の効果と見られる。

2015年時点でのコモアしおつの人口は3586人、1995年以降人口が減り続けている上野原市だが、この地区を含む巖地域だけは人口の増加・維持を続けている。

空撮画像と地図（開発事業者による）を示す。



《コモアしおつ 街区図》